



1

1 東側上空から見た遺跡周辺。手前の白線で示されているのが接待館遺跡、「くの字」に見える★付近が衣の関道遺跡。衣川が大きく南へ曲がって流れる川岸に、遺跡が立地する様子がわかる。川の南側の山林は中尊寺の境内地

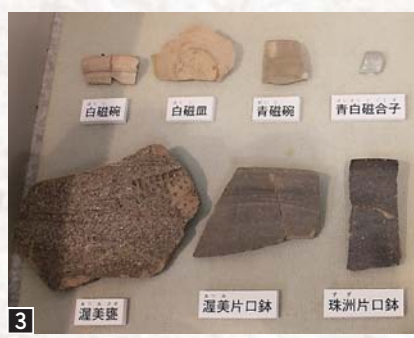
2 北からみた石敷遺構（池状遺構）。じょうろを持つ人がいる所は一段高くなっており、低地との境に石が置かれている様子がわかる

3 衣の関道遺跡から出土した12世紀の白磁や青磁などの中国産陶磁器と、渥美や珠洲などの国産陶器。このほか12世紀以降の中国産陶磁器や国産陶器、かわらけも多く出土しており、遺跡が長期間にわたり変わらず利用されたことがうかがえる

（1・2写真は、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターより提供）



2



3



奥州遺産

— ときを越え
受け継がれるもの —

第120回

衣の関道遺跡

Ⅱ 衣川関谷起Ⅱ

衣の関道遺跡は、中尊寺の対岸に当たる衣川北岸、接待館遺跡の西に隣接する。平成16年からの築堤工事に伴う発掘調査で、12世紀の池状遺構が出土したとして大きな話題となった。しかし、その後の調査研究で、池跡とは断定できず、池を伴う居館跡とされた接待館遺跡も、居館の可能性は低いとされている。

では何の遺跡なのか。衣の関道遺跡では、池跡とされた低湿地の縁を囲む石敷遺構のほか、12〜15世紀の小屋風の掘立柱建物跡や溝跡、陶磁器やかわらけの破片などが出土している。これらから、遺跡は小屋風の建物が点在するような場として、12世紀から中世前期にかけて長い間利用されたことがわかる。つまり、平泉の滅亡後も、それまでと変わらず必要とされた場であったのだ。

遺跡の北側は七日市場といい、中世の市場跡と推定されている。衣の関道遺跡は、衣川の渡河点として、市場の一部をなしていたのかもしれない。

広 告